

子どもたちの内面の輝き



武内 清
（上智大学教授）

★

子どもたちの内面にはさまざまな感情が息づいています。その感情をいち早く察し、理解し、手を差し伸べ、子どもたちの目の輝きを引き出したものです。子どもたちは、外で冒険したとき、傷ついたとき、帰ってきて親に報告し、甘え、その傷を癒し、生きるエネルギーを補給します。

（お母さんに「今日 25メートル泳げたよ。黄色い帽子だよ」って早く知らせたい）（小三男子）(1)

——がんばって、何かを為し遂げた時、その喜びを一番に共有したいのはお母さんです。

（はじめてのひとりたび……たのしかったけれど、やっぱうちがいちばんとおもいました。バスをおりておかあさんをみつけると、だきついてしまいました）（小一女子）(2)——初めて親元を離れてのキャンプ、張りつめていた気持ちがお母さんを見てゆるみ、ほっとします。

逆に、自分を温かく包んでくれるものの不在は、子どもの心に傷を残します。

（おかあさんに「ひどく、しかられてしまった」／わるきがあつて／やったんじやないのに／前に先生に／おこられた時とそっくりで／ひどく、きずついた）（十三歳男子）(3)——先生や友だちからどんなに冷たくされても、母親だけは自分の味方と子どもたちは思っています。子どもが外で傷ついて帰ってきたときこそ、温かくつつんであげたいものです。それは父親であっても、祖父母であってもいいのです。

しかし時にきびしさも必要です。いつまでもグズグズ言っている子に、親のビシヤリという一言は、かえって子どもの気持ちをスッキリさせます。

また、子どもの成長につれ、子どもを黙って見守ることも必要です。しっかり抱く時期、下に降ろす時期、黙って見守る時期を区別し、思春期がきたら、少し子どもとの距離をとりましょう。

いま子どもたちが、友だち社会、学校社会のなかで生きていくのに、いろいろ傷つくこと、挫折することが多くあります。いじめにたい、先生や学校の雰囲気になじめず、登校拒否（不登校）をおこす子もいます。

（わたしは、学校の中で／むねがいたくなる／そのたびに／教室と、保健室を／行ったり来たり／教室で勉強したい／でも、体が言うことをきいてくれない）（十一歳女子）(4)

登校拒否をおこす子も、その内面には、生き生きとした心の動きや輝きがあります。その中身は、

ひとりひとりで遠まわっています。

競争のできない子、人の悪口の言えない子、感受性の鋭い子、朝に弱い子、動物や自然にやさしい子などは、今のギスギスした社会の中では生きにくいことでしょう。それでも、ひとりひとりがひたむきに生き、自分にあつた輝きを探そうとしています。そのひたむきさを大事にしたいものです。

（無理なんて、しなくていいのだ／自分のできかぎりの努力ができればいいのだ／考え込むことはない。もっと楽になつていい／……素直に、正直に生きていけばそれが最高ののだから）（十六歳女子）(5)

一見、無気力、無関心、無感情、怠惰、反抗と見える子どもたちの内面に、息づいている輝きに心を寄せたいものです。規格外の林檎よりふやろいの林檎のほうが深い味わいや輝きがあります。その輝きを引き出せるのはやはり身近にいるお母さんやお父さんでしょう。